令和5年度ふくい教育フォーラム　開催報告

オンデマンドセクション①

個人差が大きい生徒集団に対する数学の学習指導

～一人一人が自分の力を発揮し、主体的に取り組む姿を目指して～

福井県立福井南特別支援学校　橋本健一教諭・増田和馬教諭

発表では、データサイエンスに基づく手法を用いて、eラーニング学習を用いた指導が生徒の学習にどのような影響を与えるかというリサーチクエスチョンを立て、実践を重ねて検証を進めたという実践が紹介された。その結果、生徒は主体的に課題を選択し、自分のペースで学習を進めることができ、学習意欲や主体性が向上したと報告された。しかし、一部の生徒は学習が定着しなかったり、欠席したり、質問できなかったりしたという課題もあり、今後は、そうした生徒の支援方法や客観的指標による評価方法を探究していきたいとまとめられていた。

オンデマンドセクション②

高等学校におけるレジリエンス教育の実践

福井県教育総合研究所　教育相談センター　竹澤志朗主任

発表では、レジリエンスに関する説明とともに、レジリエンス教育のプログラムを作成し、研究協力校で実践した事例が紹介された。生徒の自己理解や自己肯定感を高めることを狙いとした実践では、生徒の根拠に基づいた自己理解やありのままの自分を受け入れる様子が見られたこと、教員がレジリエンスの考え方を生徒理解や生徒指導に生かすことができたことなどの成果が報告された。また今後の課題として、学んだことを生徒が日常生活で生かすための手立てが必要であることが報告され、今後も実践を重ね、レジリエンス教育の実施を希望する高等学校のニーズに応じるために努めていくと締めくくられた。

オンデマンドセクション③

Well-beingの実現に向けた学校改革に向けて

福井県立若狭高等学校　橘慶成教諭

教科横断の取組みでは、数学と美術の授業や英語と美術の授業での実践を紹介し、教科横断が固定概念を崩し、教員の授業改善やWell-beingに繋がったと報告された。また360°カメラの活用実践では、高教研美術部会の研究授業や学校祭、卒業式などの配信に活用した事例の紹介があり、それぞれのメリットとデメリットがあったことも報告された。さらに、スプレッドシートを活用した実践として、健康観察や欠席連絡の集約や、美術の授業での作品の発表や採点などの事例が紹介され、ICT活用やDXが教育の質の向上や生徒の思考力の育成につながったという成果が報告された。

オンデマンドセクション④

デジタル・シティズンシップ教育の実践研究

～カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れた実践を通して～

福井県教育総合研究所　教育相談センター　林みどり研究員

デジタルシティズンシップ教育とは、デジタル技術を使用して学習、想像し、責任を持って市民社会へ参加する能力を育てる教育であり、春江小学校と協力して、カリキュラムマネジメントの視点を取り入れた実践を行ったことが紹介された。また、学校と家庭が連携して子供のメディア利用を見守るための取組みについても述べられており、デジタル時代における子供の成長を支えるためには、対話と共感がとても大切であり、学校と家庭が共通認識を持って進めていくことが求められているということが発表された。

オンデマンドセクション⑤

ICTを活用した学校組織マネジメント

大野市立阪谷小学校　松山奈美江教諭

校内研究会における実践の発表では、MetaMojiアプリを使って授業案や授業の記録を教員間で共有し、研究会で主体的な話し合いを深めるという方法が紹介された。また自治的な児童会活動の運営における実践では、タブレットを使って学級の目標や委員会の活動を共有し、PDCAサイクルを回す方法が紹介された。ICTの活用により、児童の活動が効率化され、見通しを持って参加できるようになったという成果と、より自治的に運営できるようにする課題があったと報告された。

オンデマンドセクション⑥

教師が自律的に学ぶ姿を目指した校内研修の充実に向けて

～「校内研修コンサルテーション」事業からの検証・考察～

福井県教育総合研究所　教科研究センター　小中学校教科研究課　大草美奈研究員

発表者がこの事業に同行し、学びの省察、目標の具体化、授業記録の蓄積共有の3つの視点から、校内研修の充実にどう影響したかを検証したという実践が紹介された。その結果、学びの省察は校内研修の充実に有効であったこと、目標の具体化は授業記録の共有と関連させることが必要であったこと、授業記録の蓄積共有は協議の深化に寄与したことなどがわかったことが報告された。また、子供の見取りに基づく授業研究会や対話の積み重ねが、自立的な学びや校内研修の充実に有効であったことも新たな気づきとして紹介された。

オンデマンドセクション⑦

教育相談活動を充実させるためのSCとの連携

～プロアクティブ、リアクティブの２軸を柱とした支援の在り方～

福井県教育総合研究所　教育相談センター　松見理香研究員・持田忠司主任

高校で抱える生徒の課題に対応するために、スクールカウンセラー（以下、SC）と教職員が共同で教育プログラムと校内ケース会議を行うことの効果と課題を検証し、ICTの活用の可能性を探ったという概要と、プロアクティブとリアクティブの2軸における実践により、SCと教職員の連携が深まり、生徒により良い支援を提供できることが分かったことが報告された。また、ICTは教育相談活動においてSCと教職員が共同連携する上でその効率化の可能性を高めることができたという成果と、心理的安全性や共同性を確保するための対策が必要であるという課題も報告された。

オンラインセクション①

「みんなで楽しく」「自分から」取り組む授業をめざして

～「デジタル教科書」「意見共有ソフト」の活用を通して～

永平寺町立御陵小学校（ICT教育推進モデル校）　新宅常朗教諭

発表では、デジタル教科書や意見共有ソフトの活用における実践が紹介された。

御陵小学校では、デジタル教科書や意見共有ソフトなどを核に、児童一人一人が主体的に学習に向き合うことができる学習環境の工夫や、友達と豊かに関わり「楽しい」と感じる学習形態の工夫が行われていると紹介された。デジタルコンテンツをヒントとして示すことで、児童がそれを参考にしながら自分の考えをまとめることができ、意見共有ソフトを使うことで自分の考えを示す機会や他の児童の考えを取り入れることにつなげることができていると報告された。また、デジタル教科書を活用することで、必要な部分を抜き出すことが容易になり、書く時間が削減できたこと、それによって話し合いの時間を充実させることや書くことへの意欲につながったこと、フラッシュ機能やドリル機能での漢字練習など、学校や家庭でも楽しく反復練習に取り組んでいることが紹介された。

質疑応答では、書くことが好きになった児童の具体的な様子を教えてほしいという質問に対して、今までは「ノートのどこまで書けばよいですか」と聞いていた児童が、「1ページを超えて書いてもいいですか」と言うようになったり、友達と相談しながら書く様子が見られたりしたという回答があった。

オンラインセクション②

子どもに委ねた学習により論理的に伝える力を高める

～デジタル教科書（国）やプログラミング学習を活用して～

敦賀市立敦賀南小学校（ICT教育推進モデル校）　小坂由佳教諭・山内剛輔教諭

発表では、小学校国語科において、２つの実践が紹介された。４年生の授業では、デジタルとアナログのどちらを使うか、学習方法を自己選択して学習できる場面を設定していた。さらに、教員が学習ガイドを提示し、子どもがデジタル教科書とロイロノートを活用しながら課題や学習方法を自己選択する自由進度学習が紹介された。特別支援学級の授業では、プログラミングを活用し、①プログラミングアプリを活用して設定に合わせて自由にアニメーションを作る、②ロイロノートを活用して作ったアニメーションからお話メモを作る、③ロイロノートで教師の見本文を見せる、という３つの手立てによって、お話を考えて書く取組みが紹介された。

質疑応答では、自由進度学習ははじめから見越していたのか、評価はどのようにしているのか、一斉指導との割合はどのくらいか、という質問に対し、発表者から、初めから見越していたわけではなく、子どものよい方向への変化からより子どもに委ねたいと思い始めたことと、評価は子どもに示した基準で教員がしていること、一斉指導１割で自由進度学習が９割だという答えが示された。また、書字の練習はどうしているかという質問に対し、発表者から、プリント学習で練習しており、タブレット入力と手書きを併用しながら学習しているという答えが示された。

オンラインセクション③

デジタルとアナログのハイブリッド

～充実した学びを支えるための教科書の活用～

福井市大東中学校（ICT教育推進モデル校）西野純太教諭・山田志芳教諭・土成永侑諭・猪野翔太教諭

発表では、社会科の授業において、デジタル教科書の機能やデジタル教科書を活用した授業実践が紹介された。デジタル教科書は２冊の教科書を２画面で表示して資料を比較できたり、関連サイトへのリンクがあったりと様々な機能があることや、デジタル教科書と紙の教科書をそれぞれ単独で使った授業を行ったクラスの比較検証や生徒のアンケートを通して、紙の教科書との比較を行い、それぞれの有用性を探ったという事例が紹介された。拡大機能があるため、図や写真が見やすいデジタル教科書に対して、紙の教科書は書き込みやすい、メモが残しやすいという面があり、２つを併用していきたいという生徒の割合が高かったという結果が報告された。これから生徒達に最適な学びを保証するために大切なことは、何を用いて学ぶのかといった選択肢が増えた中で、生徒が自由に選び判断すること、また、教師側は場面に応じてデジタル教科書や他のコミュニケーションツールなどを組み合わせたハイブリッドな授業をしていくことであると述べていた。質疑応答では、デジタル教科書を使ったときのノートの活用方法について質問があり、デジタル教科書は学習の一つのツールとして捉えており、学びをノートに残していくことは従来通り行っているという回答が示された。

オンラインセクション④

「人とつながる」

～コミュニケーションツールとしてのICT活用～

福井市殿下小学校　宮田智仁教頭

発表では、ICTの活用を通した児童・生徒の主体的な学びにつなげるための仕掛けや支援が紹介された。具体的な取組みは以下の通りである。

①プロとつながる取組み

小規模校におけるキャリア教育格差縮小のため、企業と協働し「遠隔での出張授業」を実施した。この取組みは「プロ学遠隔授業」と呼ばれ、静岡大学教育学部によるサポートのもと、教員が事前学習を行った上で児童が課題に取り組んでいる。授業当日に、企業のプロフェッショナルに児童・生徒が考えたアイデアを発表したり、講師が、児童・生徒の質問にその場で答えたりして、児童・生徒が将来の夢や目標をもつことにつながる、と紹介された。

②友達とつながる取組み

長期入院や別室登校などのクラスメイトとのつながりから、市内の規模の異なる学校とのつながり、さらには瀬戸内の離島にある学校とのつながりまで、多種多様な「つながり」に関する事例の紹介があった。「軽く　ゆるく　たまにつながる」ヒントが多く紹介されていた。

講演の最後に、参加者から「つながる相手を見つけることが大変」という感想が述べられ、「コミュニティーづくりを各学校で工夫していくことが大切である」と助言されていた。

オンラインセクション⑤

Canva de キラリ！　小学校授業＆校務 実践

敦賀市立久津見小学校　水戸秀昭教諭

発表では、Canvaの高い汎用性やデザイン性、クラウド上での協働性を生かし、授業実践や校務における協働的な学びに関する活用事例が紹介された。

授業実践においては、個人の学習成果物をCanva上で共有することで、児童同士の途中参照や他者参照できるよう工夫したり、コメント機能を用いることで、児童間の相互評価や県内外の学校との非同期的交流ができるように工夫したりしていると述べた。また、Canvaで作成した成果物をもとに、Kahoot!など他のアプリでオリジナルのクイズを作成することで、様々な人と交流できているという取組が紹介された。Canva上のAIによる画像・動画生成も活用しており、絵を描くのが苦手な児童でもイメージしたものを具現化できて表現の幅が広がり有効だと述べた。校務に関しても同様で、係活動などの掲示物やポスターを児童が自由に協働制作できるように工夫していると紹介された。

質疑応答では、学習成果物を保管している方法や家庭での利用に関する質問に対し、児童のアカウント上に保管しているため、家庭では持ち帰った端末で利用していると回答した。また、ICTに苦手意識のある教員へのアプローチについての質問に対しては、良さを知ってもらったり十分に触る時間をとったりすることで、寄り添って進めていると回答した。

オンラインセクション⑥

学校設定教科「みらい」で実現する十人十色の学び

福井県立丸岡高等学校　小林直彦教諭

生徒一人一人の才能や適正を育てるために、多様な経験と幅広い学びを提供する学校設定教科「みらい」について実践報告された。

丸岡高校の学校設定教科「みらい」 は、令和４年度から実施されており、「世界を知る」「自分を知る」「自分を磨く」の３つの領域を設定し、講座は必履修と選択履修に分かれて実施していることが説明された。特徴的であったのが、講座を受講してポイントを集める「ポイント制」が導入されていることである。１年間を通して、どのようにポイントを獲得していくかは、生徒自身が決めることができ、進度も生徒それぞれによって異なってくる。また、受講した講座が終了した後には必ず報告書を書かせて、その報告書をルーブリックをもとに評価していることなどが紹介された。成果として、生徒が自ら地域の人と交流し、受講講座の提案をするなど、チャレンジする土壌が形成されたことなどが挙げられた。

質疑応答では、「活動が多岐にわたるため、生徒たちの取り組む様子を確認できているのか」という質問がでた。「実際の様子を全て把握することが難しい。その分、報告書をしっかり確認することで、活動の様子を把握している。」という回答がなされた。

オンラインセクション⑦

対話によって思考を深める歴史授業のデザインとその分析

～哲学対話の手法を用いた「歴史総合」の授業を事例に～

福井県立若狭高等学校　松村一太朗教諭

発表では、「歴史総合」の授業における哲学対話の取組みについて、２つの実践が紹介された。一つ目は、単元の学習の前半で、生徒が考えやすい２択の問いを設定し、教師がファシリテーターを務めて問い返しを行うことで、最終的に単元の学習の本質に関わる問いにつなげた実践が紹介された。二つ目は、単元のまとめの場面で、単元の学習を通して浮かんだ問いを、クラス全員で生徒だけで追究していき、考えを深めた実践が紹介された。成果として、対話を取り入れることで、生徒の考えを基に本質的な問いにつなげて生徒が深く思考することができたことや、授業中の対話後も問いについて考え続ける姿勢を養うことにつながったことが挙げられた。また、課題として、よりよい探究のコミュニティを形成するために、教師も生徒も対話の在り方を振り返り続ける必要があることが挙げられた。

質疑応答では、生徒だけのグループの対話の質を高めるための工夫について質問され、発表者からグループのファシリテーター役を設定したり、全体共有の場面でグループでうまく結論が出せなかったこともそのまま共有し、それを全体で考えるようにしたことで、対話のコミュニティの心理的安全性を高めることができたという答えが示された。

オンラインセクション⑧

OPPA活用の実践研究

越前市立万葉中学校　岩本清澄教諭

発表では、OPPA(One Page Portfolio Assessment)を活用した社会科の実践について紹介された。OPPシートを活用して毎時間の学習履歴を記録し振り返ることで、学びの深まりや考えの変容を生徒が自己評価できることを紹介された。３年間の実践の成果として、継続して行ったことで生徒の記述量や内容が充実したこと、結論をまとめる前に生徒同士の対話を取り入れたことで内容が深まったことが紹介された。また、OPPシートを紙からデジタルに変更したことでOPPシートの管理が容易になり、いつでも教師が確認できる、生徒間の共有が簡単、生徒が紛失する心配もないことが紹介された。最後に、万葉中学校での学習履歴を活用した取組みとして、体育科や総合的な学習の時間での実践例も紹介された。

質疑応答では、OPPシートをデジタルに変更したことで生徒にどのような変化があったかという質問に対し、発表者から紙ではあまり書けなかった生徒の記述量が増えたという回答が示された。また、OPPシートに記入する内容を充実させるための工夫に関する質問に対し、継続して取り組んできた３年生のシートを記入例として提示したことで、生徒は書き方が分かり次第に書けるようになったという回答が示された。

オンラインセクション⑨

ぴこっと（個別教育支援システム）でつながる・サポートに生かす

鯖江市鯖江中学校　島田千晶教諭

発表では、ぴこっと（個別支援教育システム）を使って、学校が家庭と情報を共有している様子が紹介された。具体的には、「安定した気持ちで１日の学校生活や家庭生活を送ることができる」などの個別の指導計画の短期目標が、学校や家庭で達成できているか担任や保護者が評価したり、学校や家庭での様子を記入したりする事で情報の共有を行うことができると述べた。ぴこっとを使うことで、空き時間にいつでも入力することができ、伝えたいことも時間を気にせずに手軽に入力することができ、また、ぴこっとを活用するようになってから、共有した情報を基に家庭でも子どもに合った休日の過ごし方ができるようになったり、個別の指導計画の評価に生かしたりできるようになったと紹介があった。

質疑応答では、「保護者との電話対応の時間が減ったとの発表があったが、保護者と話す時間が減っているのか。」という質問に対し、「確かに保護者と話す時間は減った。しかし、必要な情報共有はできている。電話ではその日学校であった良くなかったことを話すことが多かったが、ぴこっとでは、学校であった良かったこと、できたことなども共有できている」という回答が示された。

オンラインセクション⑩

個と集団の学びをつなぐデジアナ活用の社会科授業

福井県立高志中学校　小川駿也教諭

発表では、生徒の実態に基づく授業の設計、実践と、授業におけるデジタル（ICT）とアナログ（紙媒体）の活用の実践が紹介された。生徒の実態に基づく授業の設計、実践では、人口減少やウクライナ侵攻など日本や世界の情勢を背景とした単元を貫く学習課題を生徒と設定することや、授業を通して生徒の学習コミュニティを形成したいという思いから学習課題の解決に向けて他者との対話を重視しながら探求活動が行われていることが紹介された。授業におけるデジタルとアナログの活用の実践では、デジタルによる生徒の思考の共有、他者との創造的な学びとアナログによる予想や話し合いの過程の見える化、学びの振り返りを組み合わせる「デジアナ」により、個の学びと集団の学びをつないでいく取組が行われていることが紹介された。

質疑応答では、オンラインによる他校とのディベートについて事前調整をどのように行ったのかという質問に対し、相手校から打診があり話が始まり、オンライン等で日程や授業進度の事前調整を行ったという回答が示された。

ハイブリッドセクション
トークセッション
講師からの話題提供「教育DXは誰のため？」

小﨑誠二氏　（奈良県立教育研究所主幹兼奈良教育大学客員教授）
宮田智仁教頭　（福井市殿下小学校）
小川駿也教諭　（福井県立高志中学校）

最終日のハイブリッドセクションでは、ICT教育サポートセンターからの話題提供と各発表のダイジェスト紹介の後、講師である小﨑誠二氏と、オンラインセクションの発表者である宮田智仁教頭と小川駿也教諭によるトークセッション、「教育DXは誰のため？」というテーマでの講師からの話題提供があり、最後に参加者によるグループセッションセッションが行われた。

ICT教育サポートセンターからの話題提供では、担当者から今回のフォーラムに込めた思いの紹介があり、「先生方の実践だけでなく、そこにかける思いに目を向けてほしい。そして同じ思いを共有する仲間を作り、これからの実践の励みにしてほしい」という話があった。各発表のダイジェスト紹介では、オンデマンドセクションとオンラインセクションの合計17本の各発表について、それぞれがどのような内容であったか、また、それぞれの思いが込められた実践に、共通する思いがあったことも紹介された。

後半のトークセッションでは、まずはじめに小﨑氏から、DXの目指すところはWell-beingであり、DXとは、デジタル技術を使って、人々の幸せや健康、人間関係を高めること、学校はWell-beingの場であり、児童生徒の心を育てるために学びと遊びを区別せず、遊びを通して学ぶことを大切にすることが大事であるという話があった。また、目の前にいる児童生徒と一緒に議論して考え、ともに成長すること、教師自身がいきいきと生きるために興味のあることを学び続けることが重要であり、教師として学び続けることに繋がる話もあった。

またDXの過程としてデジタイゼーション、デジタライゼーション、デジタルトランスフォーメーションの３段階があるということが紹介された。教育DXとはデジタル技術を使って教育の質や効率を向上させることであり、教育DXの目的は教員や児童生徒のWell-beingを高めること、そのためにICTを活用して学校を社会の最優先にすることが重要であるということが示された。また、ICT活用の注意点として、ICTを目的でなく手段として使うことが挙げられるという話や、教員の役割は児童生徒に教えるだけでなく、生徒と一緒に学び、児童生徒の学びを支援するであり、ICTを使って児童生徒の学びを評価、分析することが重要であるという話もあった。

そして学力の３要素について、生きて働く「知識・技能」を習得させること、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養という学校教育法をもとに整理された３観点についての話もあった。

最後のグループセッションでは、これまでの様々な思いや話を受けて、どのグループでも活発な意見の交流が行われた。